

葵の祈禱所

紀伊徳川家と高尾山

紀伊徳川家関係文書

明治大学博物館 外山 徹



『高尾山葉王院文書目録』に収録された紀伊徳川家関係史料

宝暦五年(二七五五)二月に大慧院様から飯繩権現宮前へ掛ける葵紋付の戸帳が寄進された、という記述が江戸後期に作成された由緒書の中にある。大慧院とは六代紀州(和歌山)藩主徳川宗直のことである。由緒書は天保七年(二八二八)の作成なので、何分にも時間が経ちすぎているが、字義通り受け取れば飯繩宮(現在の御本社)を訪れる参拝客は三つ葉葵の紋幕越しにご本尊を拝んでいたことになる。そう、江戸時代、高尾山は紀伊徳川家の祈禱所を勤めていたのである。

このことは現在意外に知られていない事実である。江戸から明治への移行は我が国の歴史においても一大変革であった。幕藩体制の終焉と神道国教化政策が、江戸期以前の高尾山像を構成するいくつかの側面を忘却させてしまった感がある。実は、その以前には、我々が今日眼前にするのとはまた

異なつた高尾山像が存在したのである。

葉王院文書の調査

今を去ること三十一年前のこと。法政大学は多摩キャンパスの開設にともない、地域社会への貢献事業を企画したが、その二環として高尾山葉王院文書の整理・調査が実施されることになった。それを主導したのは、故・村上直法政大学名誉教授(当時文学部教授)であった。葉王院文書については、後北条文書がすでに江戸後期の地誌『新編武蔵風土記稿』に収録されていたが、本格的な学術調査という意味では、一九六〇年(昭和三五)の東京都教育委員会による浅川流域文化財総合調査を待つことになる。この調査によつて、中世文書以外にも江戸期の史料が相当数残存することが確認された。

一九七八年には村上教授と北原進立正大学名誉教授による『武州高尾山史料集』に、その主要な

いくつかが翻刻され収録されることになった。村上教授は一九八〇年にも、高尾山史(高尾山葉王院文書を中心に)という論考を『高尾山小冊子』という葉王院発行の小冊子に執筆されており、時の山主山本秀順(現下)とも親交を深められていた。そしていよいよ、その文書群の全容を明らかにする機会が到来したのである。調査は法政大学の教員・卒業生・大学院生・学部生によつて結成された調査団(団長・村上教授)の手によつて進められ、翌一九八七(昭和六二)年六月、高尾山葉王院文書目録が刊行された。

この目録に加え、間もなく別冊で補遺編の小冊子が刊行されることになった。そこに収録されている史料のほとんどは、紀伊徳川家から到来した書状類である。これらの一括したまとは、以前からその存在自体は研究者によつて確認されていたが、作業当初には整理

対象から洩れていた。遅れて整理に着手したため目録が別冊となるのだが、他の古文書類とも違う特別な存在として別途保管されていたのかもしれない。ある期間に紀州家から来た書状全てではないかと推定される量が散逸もせずそのまま遺されていたことが印象的である。

この時の調査で所在が明らかになった史料は合計二五七三点にのぼる。時の政権や本寺・本山とのやりとり、法流の継承や財産管理関係の文書、檀家帳といった寺院文書に一般的な内容の中で、件の書状類の関係もあって紀州家関係史料が三〇四点を占めているというのは極めて印象的と言っ



紀伊徳川家の葵紋

その間は葉王院の側から紀州家に対し積極的にアプローチしており、その関係で代々の藩主との関係

を記した由緒書が何点か作成され、重倫の祖父宗直の時代からの交渉の過程を辿ることができる。宗直は従兄である五代吉

文書がほとんどを占めるが、これらが後から整理され目録が別冊化された書状類である。八代藩主徳川重倫の時代のもので、これは重倫が高尾山に対し格別な帰依を示したことに由来。それ以外の現用文書は九代治定の時に一時関係が途切れた後、一

〇代治宝の時に祈禱所として復活した寛政九年(一七九七)頃から、幕末にかけて残存しているが、重倫の代に比べると数の上では少なくなる。

宗が徳川宗家を継いで将軍に転出した後、支藩の西条藩から紀州藩主に就いている。時代は享保期(二二六〇〜三六)であるが、この時期は飯繩宮(現在の御本社・東京都重要文化財)の建立に象徴されるように、高尾山の歴史において

も一つの画期をなす時代であった。時の二六世山主秀憲から一七世秀興へと法流が継承される二八世紀は、居開帳・出開帳をはじめとする行事が盛んに執行され、参詣者が大勢訪れる記録がたびたび見られる。また、護摩

札の配札圏も武蔵国中部や多摩郡の東部多摩川以南の地域へ大きく広がるといふ、高尾山信仰の拡張期と言えるが、その背景として重倫の帰依による財政的なバックアップを考慮する必要があるのである。祈禱所が再興される寛政末年から文化文政期にかけては、大衆文化の爛熟期において庶民参詣もますます盛んとなり、葉王院としても徳川家の権威を背景に、より積極的な信徒増を目指したと考えられる。

本連載にあたっては、先行研究に「紀伊徳川家」あるいは「紀州家」

の略称を用い、藩名については「紀州藩」を採用します。紀伊徳川家と高尾山との関わりについては、先行研究として、吉岡孝、近世後期における寺院の動向と社会変容―紀州藩・葉王院・足袋屋清八―(『法政史学』四六、一九九四)及び安田寛子、高尾山葉王院と紀州藩―葉王院文書の書簡と由緒書を中心に―(村上直編『近世高尾山史の研究』名著出版、一九九八)があります。本連載では新たな史料検討の成果を採用すると同時に、これら先学の成果にも依拠することになります。紀伊徳川家の動向については南紀徳川史刊行会による『南紀徳川史』(一九三〇〜三三三)に多くを負うことになる。また、笠原正夫『紀州藩の政治と社会』(清文堂、二〇〇二)、小山馨城『徳川御三家付家老の研究』(清文堂、二〇〇六)、同

『徳川將軍家と紀伊徳川家』(清文堂、二〇二二)を参考文献とします。